平家物語 巻第十一

リ 5
2904
11

2004

宮内省圖書寮

平家物語巻之十一

弘經經亂卒夢勢参流事

平家諸大將東國發向之事

法皇い伐く島御幸ㇾ事

平家ㇾ軍兵蒲原に陳を取る事

兵衛佐殿始而義經に對面ㇾ事

維盛以下逃帰る事

平家人〻都入ㇾ夷

主上遷幸之事

南都衆徒牒狀ㇾ事

東京帝國大學藏書之章
廣辻氏藏書記

鳥羽院衆徒牒帖乃事
福田冠者希義被為誅戮
平氏七人ゝ再ひ東國發向之事
南都大衆蜂起乃事
三位中將重衡南都を燒事

平家物語巻之十一

弘經綱流卒寿勢參事

兵衛佐殿ハ使者を上総介平業介方へ遣ハしておの〳〵急参ら〳〵是程乃大事を引出〳〵つゝ此上ハ頼朝を世ハ〳〵ゆるさんとゝ思ひらせ〳〵と西人の心を廣常を八父とたゝ乃常流を母と四郎〳〵と九めしけゝる西人たゝのしゝ心ゝ仕ゝ廣常流三千余騎の軍兵を率〳〵て杉山浦ゝ參會〳〵則兵衛佐殿を御具〳〵申〳〵て總の國府ゝ入奉てゝ〳〵まいゝ〳〵ゝ〳〵ゝ仕ゝ佐殿ハ石橋山乃ゝ敗ゝ北川九ゝ付ゝ〳〵ゝ大番

而てこのとき引ちらし〳〵かたく〳〵六七十流おのゝ置
くれ〳〵是を乃ち常陸の江戸葛西の者ども召集
あるべんとやりたれども尤ちゝ〳〵として其定にせざりける
ほどに六年より記と成ぬ上総介廣常と此合戦を聞
く所遠国荒り野と四〇て當國中任北住南廳北廳
南北西望東畔蘇所口世界山岳共者共家の
方〳〵て強大なるをたのみよせ〳〵ちんを待るさま
う〳〵なるをお具して一万ばかりにて上総の國府と称
舎弟此多神をや上たり久しと兵衛佐殿聞ては祝
平を失ふて宜ひけるもちまれ条なのかに笑いの泊

とりちらしれ汐弟尤神妙也速に後陳にくへ記出いたも
らう此勢お具して一万六千余騎に成ぬ廣常屋形
に坐りて豊祝の部ふれにのていひりの兵衛佐殿
を一定の大将軍也廣常是程の多勢を率して世の
ひ祭りたるんにを恢感して急ぎ出合て戦とは
しのをてちゝめたを追従ことをと義宣をんと思
つるが實否をのてれ多ひつる河が我けも一にを大く
ていおるんも進人ひり荒涼に堪ぬれ〳〵一定
本意遂ぬるんあるんと昔将門東八ヶ國をおこすた
て座うて王城ト責入らんとしけ系俵藤太謀をめく

らしてかたくひらたんと思て是非を卒して去たり
けれとも将軍のかりに仮てきつけける髪を取立すして
白衣にて大童なる出家にてはあるまじきこと
なりをといひけれとも秀吉さるかしこたる者にて北人の林
以ても所詮たはりもいかなる日本国の大将軍とも成るし
と思おもてなりけれとも秀吉なをもて出家なる
為なりつる物を長いひ名物兵庫佐武蔵国と下
総国乃境阿の七川乃そはに陣を取る武蔵七国の
住人江戸の太郎葛西三郎か一類、数を少なして来れ
上ひ兵衛佐七なひけるかれらとも皆衣笠七城に戦を
射たり者にと有るあや大庭畠山田しかるして西公を
捧ぎて参りたるといはせられけれとも没ス年三
陳しかるして免除せられ以ても所詮七なひりるに平
家七ひる絵小去新かれ惟盛を大将軍として六万余騎
を上総ち国を先陣として京都の当ち行盛
を東国七東門者にて今ち尾張ち国山ち三ち中
斐信濃西国七ち現のうまおろ以先に北川を渡して
足柄を張るとして西古川を前にして陣を取人西ち
と有けれとも北義仁ち出ろうへしと皆各ち所ち江
戸太郎太の子ち七東内者也浮橋をなしして渡ちい

とれるいろは江戸を兵衛佐は氣色を入ぶんと思ひ
れを左右ぶく浮橋を渡して矢を流す為此橋を打渡
て武蔵國豊島が上龍が川乃橋とゝ家に陣を取
其勢已に十万騎に及へり八ヶ國は大谷小谷武蔵權
守庄司大夫かしいふ者ども一騎は者共我おとらじと
或は二三十騎或は五十騎百騎めん〳〵に白旗をさし
て我こそ源ヶ十郎兵衛佐を先當國六所の大明神
に奉りあひて上矢を取て獻ぜら其時豆山次郎
兵のとも様沢乃六郎成清をよりていひけるは當時
世間の有様いかゝ〳〵者父庄司叔父武
蔵六郎に伺公は上をよの所は思へきはのゝ様とり三
浦の人〻と一所してうつを其日押三浦乃人〻
いひ置め今兵衛佐殿船岩に重り思へ歩ひて
推参せはやと思へいかゝ様といひけれは成清かけら
其すゝ此世を見ぬ今ハ合はんと為つる也弓矢を
取習ハ文武両道なる事也ゝ又雷雨
なり今は主佐殿を代おれは君也ゝ成る及
ゝ〳〵ゝ山折れるゝ〳〵と定て追討
は使遣はれぬと受人〻ひとゝ有れは上言ゝ有子白旗
白弓袋をはしてまゐりてきたんよいろ有中国

兵衛佐殿をしたがひ奉る所に父重頼叔父有重等あり
佐殿の御中に坂をたて我を射たり〳〵上野殿いまは同心
なりとて勢たり定てなんとのたまひ給
重忠申けるは坂をたて七軍に事をよせ世務三浦十人
人に再三申合はいかゞ其次第定てひがゝしの金剛の
意趣なりと雖君代代をもつて忠誠をはこぶ事人
次に鎮代重忠先祖八幡殿武衡家ひらを追伐
せられし時重忠代代祖父十郎武綱初て奉て
世をたもつて代代佐殿を刑せの武ひら
追伐せられ給ひ代をもつて今平氏源太夫尉光生

後を大倉館にて責られし時乃軍に重忠父光
をもつて則時より所〳〵に源氏を為たる
の〳〵重代あり代々恩賞をもつて其名代上京
と陳〳〵ありと無双代千葉介土肥ふたゝいう有
代とこれけれと是等やうに留山をもつて郡
なり留山きたいうん沼いふ武蔵を掠先普代の先
〳〵山方へ奉ひきり〳〵ならい留山をもつて
めと一向小中名誠に理と思ひ名と留山に
せあひけるを誠に陳〳〵嘉地名ふきかのらんはら
を我日本国をあ平らぬほとを一うう先陳を郎

庵〳〵海の無にて此後を歩〳〵として物いうこと一
りんけるをれけるとのやまをしてはて小をんも
はるとまをしてはて小をんも

平家ハ諸大将東國發事

是を聞て武蔵お摂乃國の住人等一人もとれ秀
池殿乃大庭ハ三部此次第を聞て時をしあのひて
平家ハ逆いよ〳〵をりるの足柄をこえ来て伊豆の宿
に着りるの光ゝを甲斐ハ源氏二萬騎にて
駿河の國へ越るる後ハ兵衛佐ハ雲霞の如く
して責来ると聞へ先ハ中に取かのられて叶まじと

後ハ一乃草摺を切おとして二流權現へ参りて お掛
ハ國ふ引うへりて奥ハ山へ逃かりけ乃事家ハかれは
おひく御所のをり志ろ人ハ兵衛佐の恥のつ
ゆ沢ふ討ひをはすへしとて太政入道ハ孫小丞ハ
大臣の婿る惟盛と申ハ打并ハ入道の舎弟薩摩の守
忠度とて然ハ者たちのたけき人と聞ハ者ちひく城ハ
らうへ入ぞ此ハ本の子にて三河の守知教と申ハ此三人
を大將軍として侍に上総の守忠清以下伊賀ハ
伯耆ハ丹波無官ハ数百人其勢三万ばかりを率けりてかの
惟盛ハ貞盛より七代へ入道おもの婿源小丞の内大

原重盛公の猶男也平家嫡流として今出徒の乱
を治めまして大将軍の撰旨のしるしをうけ
也十月に被追代の者（院宣被宣下官府宣云
左辨官下東海東山道諸國　應早
追討伊豆國流人源頼朝并與力輩事
右大納言藤原實定勅宣奉伊豆國流人
源頼朝忽相語山黨欲虜掠當國隣國
抜逆之至既絶常篇宜令追討右近衛
權少將維盛薩摩守忠度參河守知
教義又東海東山西道堪武勇者同
可追討之其中抜群有議功輩可加
不次之賞依宣行之
治承四年九月六日　左大史小槻宿祢
藏人頭左中弁藤原經房
義とかゝれたり昔は朝敵に対して外土に世を大将軍先
参内して宣旨を給る宸義南殿に出御あるを清
階下に陣を引内辨外弁公卿参列して中儀云
命を行なれ大将軍副軍各禮義を正して先を
かるさしれとも義平天慶七先例年久しを成
ゆたとへのしるし今度は堀川院九山時康和二年十二

川因幡守正盛前對馬守源義親を追伐せたの
に出雲の國人下向せし例に倣ひ給ふ者を
給て役の袋に入て推式の首にうけ出せり給と
雖朱雀院の時兼平年中に宋將門を總國相馬
七郡に住して八ヶ國を押領し平の親王と号して
都へ打登り王帝位を傾けんとあるを謀叛の起と
申けれとも花洛の中に起斜なりしに天台山にも法
性坊と大僧都尊意を始として諸寺諸山に調伏の
祈禱をぬきんぜられ給ふに此人こそ先祖平の貞盛宮
にて上古太とやらの時つかせ給ひて將門退伐の
宣旨を兼ねる先例に倣ひ節刀を給はる鈴れ
奏をりて相撲節會の時方屋左右の大將の禮
儀にあるべしとの由を奏し給ひ南北ほくとの分をのの
出るに大將に貞盛副將に藤原秀郷民部の忠文を
東國へ向ふ道すがら所々の猛く中き起事を
聞し有り中に駿河國清見ヶ浮島の原に
そ中り給時清原の吉子義と云者民部を
ねらひて密盜とり入に出る
漁舟火影冷燒浪驚路鈴聲夜過山
とよみ給ふ事なり

の館にお入ぎ戦せん〳〵うけのふよてほとをく扨門〳〵
たれ出り其旨をかゝへ〳〵く負盛都へ登りて奏
聞す君を始まらて九重の貴殘上下是を伝すと
い事お〳〵則大内を見しーて獄門にけられてこれふ
勅賞行る上重大たりし負盛たちまちに西将軍
とおかせらされ其時陳座のさきう左大臣實頼小野宮殿
右大臣師輔九条北外公殿上人座に列しまうり
給九条殿ちち堀ひ給ふ大将軍進て饗来る
朝歌をたいらけたる事ちちにおのけ給た後軍た
副將軍後ろ饗来をたまりしくありいて合戦の思い

よ〳〵猛出きるに負盛一人勅賞おこなはるるすたゝ文本
さおくや其ん勢世おらん大将軍程の賞にた我てお
おろれおもすれ〳〵に應する賞や忠文小おれ
るへやらんとやは勢ものもれしるを小野宮殿のみ
勅賞おこなはるへ花事受けふむ祈〳〵ふ〳〵と
ちちせのひけれる民部卿忠文賞をも（ふおおろ
れさりけり忠文たちまちいうををふ〳〵て内裏を
陸出られけるに天上の地のうつうたうりる大声を揚
ておれ〳〵宮殿お業おう〳〵九条殿の門ちと滝おう〳〵
ふくとさけひてふををたまとおて左右のふをにきり

もひなる十代つめ二寸ばかりなりてほのかにて
ぶきりとをしたりなれをみるおもひたるしく礼を
ゐを志ゐるもとしやのそ志ゆく所ゆへの人を思ひ
死よ志ゐるなり悪霊とぞなりるるされをるや小弥
文の仏事たくてしおのつくるゆるくの人々ゆかりん
九条殿の仏事を掌政たゐさせるを小弥文殿の仏事
をなれば九条殿の婢子ぞ成るる新敵をたいるる
俊式を上代をかくを有ゆるを惟盛が計ゆを俊子
きしを先派をもるを思たに似たりかくるを可奉行と
ぞ時の人申合けるを礼のいとのつのひ有生る

福原に新都を出同しくを十八日ゆるきみやにつく
是が東国へ趣く甲冑弓矢馬鞍部等に至るを
輝くをのて出ニたりなれをみる人歳千萬と
いふ事を志るを権亮が将惟盛を赤地の錦の
ひたれ大ぶびをしぞて紺地の錦たてをたる
るの(たるをひの縫ー連銘芝をゆる馬ぞ)ふとく
たくましくいかけ地に金覆輪をかきて乗
たりなり年廿ばかの容勝れたりなれを給ふかくるを
の及つ記をみ(多又忠度志)ゆるるを唐の紙か小
袖をおりつるかくぞ書きをしけ

東海道第五宿を宮と云袖ふりたゞす社の森はなれて
と世おもかりたりなれとなれたる
ものゝをのゝおけつん趣て行さきを学ん此と思へ
と迷へたりける此人貪慾うるさくなれなれと昔將門の首
此はのひの事をあるにや女房此本宮の大きのお
ぬをきるるにて迷ふ事いまゝ恐へしきの
まのるとかの貪盛のおうれるもとゝ此人大きゆう
るやうに人こそおそしるゝたれのみおうんなのこと
何の文はの女をうをとらひりて花〳〵道もを
事有りけるに人を志のもとおうひてあまたゝかく
つゝれるうたに何のうきよの事なのてみのうかし
おゝはるられたりつうひかといへる花にるおれなま
うれのすとまて兵ちまてつくりと作れ名を内かを
人山ちかとまを出る程ふかりしうを志ゝ先とうや扇を
もつ〳〵とつうひかゝしなたり名を女房是を笑内
ゝ志れひたる声ゝて此の此に有さく虫の声より
いを花けを扇をあこて つうひ変られ名りはるのふ
はもしまるまおりてはゝ房出のひてかとなのまを
をつうひ屋天名めるを此いはうしふやうとゝん義はれ
ちよとのしまゝ此の切に有たく出の声に聞れたま

物をいとてはせあり（といふ文を書い出し〳〵云
れたりなを此人〳〵ハ名をかくしてかくしなるゆえ化けり事
なんらもやはり〳〵ゆえ〳〵十九ゆゑ〳〵ゆゑ都の東國
〳〵川たち今度合せんはめるて馬鞍のたくみの
度の中なる大將軍惟盛のかそん其名を書い入
なりなるゆえ家を六ヵ所の河原を上りに向かせた
り其勢三万ゆゑ此たつ〳〵ゆゑ良宣法印事と
乃至なる惟盛と申りけつ〳〵ゆゑ
けなりをなくなる〳〵なる化物を歳千年といふ事を
ら〳〵宋四〻の十禪寺の中納のおゆゑ〇六千原
あるゆゑ化物をうちつきて奴を物
なるゆゑ毎なる色の物なれるゆゑ口おかし〳〵て鎧鬼
なるゆゑ惟盛をつく〳〵と〳〵て化〳〵口〳〵ていひなる
ゆれすゆゑ容顔ゆゑ鎧あれた大將軍のおか〳〵
軍兵千余地ゆゑかいきを志り北〳〵なる事をなる〳〵
さゆりたけゆゑなるあゆりといひてうきけすゆゑに
らせたゆゑ何のなていひけるゆゑと尋化ゆゑ天狗の人ゆ
変〳〵ていひけれゆゑ〳〵なる物のいん

法皇巖島ニ御幸ゆ事

九月廿一の新院ゆゑいつくしま〳〵御幸ゆ去ゆ三月

に御幸ありし其当るしるや二月九程天下静
りたるやうにみへて法皇鳥羽殿を御かとゝのをしに
ひんぬる五月之倉北宮北山事にてうちつゝた
吉川やりやうに天変幸きりうし地震つゝきて
殺意おだやかのみうゝ世して天下新禍此所念ゆ
して八聖体座礼不穏の形状也為也一年二度の
御幸と神意慮いかてゝ流れさる所成就疑
ゆしとなんせる五位入道右大将宗盛以
下公相雲客八人連署紙黒字の法
花經を書て供養せるるなれ外につゝ今流た
て提婆品を抜されたり仏の出教文出志ゆんと
開〻〻其の教文にいはく
蓋軍法性山静十四十五之月高晴權化地深一
陳一陽之風骨扇夫任都岐島社者名称普
門場効験無双之砌也遥嶺之廻社壇也自
顕大慈之高峙臣海之及祠宇也暗表弘
誓之深廣伏惟初以廣昧之身忝踏皇
王之位今翫讃遊於廣郷之訖樂宗於
射山之居而倫拙一心之精誠請孤島
之遥瑞羅之下仰冥恩疑祭念而流

汗宝宮之裏垂霊託有其告銘意就中
殊指怖畏謹慎之期尋當李夏初秋
之候而間病癖忽侵弥思神威之不空
萍桂頻指轉无医術之施験至祈禱
雖蔽霧露不如抽心芽之志重企抖
藪之行漢々寒嵐之底卧旅泊而破
夢濤〻嶽陽之道望遠路而極眼遂就
扮揄之砌敬展清浄之筵奉書寫色
紙黒字妙法蓮華經一部開結二經般
若心經阿弥陀經一巻又千自奉書寫
金泥提婆品千時蒼松蒼柏之陰共添
善利之種潮去潮来之響暗和梵唄之
聲抑弟子辞北嶺之雲谷垂無涼嶼之
夢廻凌西海之波二度深知機縁之不
浅抑朝祈之客亟一暮賽之者且千
但尊貴之帰敬垂多院宮之往詣未聞
之禪定法皇初貽六儀弟子所身深運
其志彼嵩之月前漢武未拜和光之影
蓬莱島之雲底天仙空陽垂跡之塵仰
願大明神如當社者霊无比類伏乞一乘

御典新照冊祈忍彰丟應敬白

治義四年九月廿八日　　大上天皇敬白

奉幣の後回廊に出御ありはるかに伺ひ奉れば人々を皆退けられて入給ひ宗盛
と二人ひそ〳〵と申されけるは東國兵乱おこりて以来
源氏に同心の輩〳〵起請文を捧げて入給ひ
ぬ人安からぬ事なり弥宮仕へ〳〵の輩〳〵乱れ
ぬ〳〵北方礼島に抱置まいらせて五位の〳〵と等
たりの礼儀上皇の御ちえの勢ひ其条〳〵と安〳〵
但し来年の事は入給ひたる事を抱き給へ

心はゝ〳〵めて二心なる身と思うん其本意なく礼と
礼を宗盛卿にて硯紙をとりてまいらせたりさていま
とかく人々と葉をあはせるかり入給ひにて
抱き礼てより入給ひ是を拝見して上皇を拝し
奉りて今は頼もしくなんへとて右大将にみすおよ
ぼ目出度のと沙汰け礼を入給ひ取て懐中に引入て
退出す其後人〳〵に御ものいはせつゝ〇かゝちをけ
なる紅色にてやさしき時國程なまいろなりなへ
ば人〳〵つや〳〵其人を注進のかりにおかつゝおかをけ
ばとのや十月なる還幸今度は福原の新都の御幸

ちかれ　平敦盛　忠度　つらいとをけり十七日　義経と
所々法皇のもとらしく　市所たてゝ　ひさらをもひいるゝ
三条殿へ　流れ　もの　西北の　入乃おも（第九）
ひさらをもひきこしたて　ぜんとる市　仏に　右京大
夫　修理亮　ちかれ　ゝの市　素とていまゝ　志比谷
市所を　出　市勢　ものてたき　是　いつくしゝ　ものは
車　ぜ　ゝ　にや　入道　ことの　ものを　きたれ　ぜ　ゝ
礼　ケ　礼

平家　軍兵　蒲原　に陣　を　ゝ　事

東家　ぜ　ゝ　ぜ　使　三方　ゝ　ぜ　軍兵　を　ぜ　て　國

富士に日を限て宣旨をとゝ　ゝ　けゝ　礼　ゝ　兵衛佐のゝ
せいよおそれ　従ひ　ものゝ　ゝ　ゝ　ゝ　程に　兵衛佐　足ゝ
をとりゝ　ゝ　後の國　ぜ　島の京に陣を取勢を　へ
けゝ　ぜ方　六千　ゝ　ぜ　ぜ　兵衛佐　木瀬川に　宿
ゝ　東家　ゝ　三方　ぜ　ぜ　ゝ　國の蒲原の宿　陣
を　六十月　廿四の　ゝ　ゝ　夫合　ぜ　定　ゝ　ゝ　ゝ　常陸
乃　の　住人　たけの　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
男　三の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
清　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
文　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　抑兵衛佐の

勢ハいと〻程の子へつる志進の男ヶ原と云ふと
ゝやらゝハ其たけ七くれり高りなれ但当時
七勢ハ常陸國志〻うとりして世ちゝ國府へ
ひしとつ現て山先陸ハたせ河へつ現て鎌して八月
日みちひやぐくの山ゝ川ゝ皆武者にてのとゆせを上総介
是を聞て中けるを大将軍七内心の定七勢玉たり多ゆ
つてゝ高ゝ物〻ゝ同いとゆをゆるゆるゝ高くたゆゝ
ゆを今七足つゝを越き大庭三郎留山次郎を召仰
なるゝんにを兵衛佐まゝ勢ハつゝゝとゆ名月ゝ大
将軍忠常に兼ゆ當ゝ盛を召ゝ河ゝ合戦の

事を後せゝ化るつゆてゝ抑頼朝勢の中ゝゆの礼
程七号勢のゝ七ハいゝ七ゝゝ河りゆんと同仕礼をゝ
ゝ出ゝゝ号勢のゝの上四百七ゝゆくゝ七ゝ十三束
十七束をゆるゆの七ゆ七我を多くゆ（ちを二人張一人張を
七ゆ持ていゝゝひ二三百ゆゝゆをゝゝ七ゝいゆ
ゆりゝの実盛見入へてたゝ七八十ゆりゝん馬を早を
七世を退の医ゆ百七ゆ七乗庭を乗ゆ七て馬
のをゆを高ゝゝ親ゆ老稿をゆ高ゝ子ゆ高ゝ流者ゆ志
正世花をゆ子ゆつゝん夢ゆ事ゆゆ〻ゝ七ゝいゝゆる部
等ゆ一人ゝてつゝ七馬ゝ五足つを正ゝゝゝゝゆ者ゝゆ

八人京武者五國の者共と一人手おひ取れ給へとて
ゆつて出て七八人引退て馬を博労馬の京出に五十
斗ハ出たりとも思つけ出て追つけてうちんの東國の
ものらての武者共十二の方のてゝ礼ものいてゝあるをむか
ひの手ハ坂東武者十人上京武者百人を受けられ給へ
ゆきへ〳〵大将へすん能中原氏の軍ハ廿万余騎と
聞ハ此方の軍ハ三万よりたる程なれ（因し）
程よりうんたりなに程なく（かれらを國こ）
東内者にて者を東内の走りをんあひたてゝれたち
ハ為ゆ〳〵九大事ゝと京より出もうりゆ
ゆ〳〵のを當時源氏にたゝかしたる人ゝ九名字相
兼ハ敵対ハ取ゝ見へ（者ハ）ハ此ハ四方にて武蔵
お相ゆ入ゝ世給て當国の勢をあ〳〵具〳〵てゝ井のり
りゝ陣をうて敵を待せな（と再三ハ〳〵を聞ハ
ハゝて無勢ハ當国の勢をゝれ申ハ（と今度の
いゝ時ハゝゝうん武ゝん加ゝ中ハゝとて實盛おちて軍
を世しゝやゝるゝ九ハ給ハ右大將殿の御息あり九ハ
ゝて名を今一度見ハ入て世きい羊を給てゝり
まいりて死ゝ給ゝしとて千騎の勢を引ゝけて京へ上り
登りゝる大將軍九ハ〳〵おゝして心ゝゝり四ゝ九ハ九ゝ

ちゝ盛ゆゑ所に軍ハせぬゝいはきとも世のてゝのゝ山を
おもへゝく八幡殿と大将軍たちとも思ふ仏を思ひ
やゝゆゑハ八幡のつゑ者皆兵衛佐に志かゝゝ吟伝を渡
河の者共たまゝ思ひたるゝいすゝ人すん五郎三郎ともゝ
俣事にのひぬゝ所者二三百人にとゝりゐ山ゝ
さゝらく山をもゝ越ゝハ中ゝ悪くゝ但富士川を渡
にのてゝ源ゝ勢をめして又十騎ハかりに成と
ゝゝ九ゝ大将軍ハ命を惜ゝ者ハのゝとゝ九九ゝ
楚花ゝ者ゝにゝりゝ福原を三のゝ時入ゝ成
作ゝ合戦の次ハ忠清ゝ志かゝゝ也

奥地由ゝ志しく作ひきとも事ハ廉ゝ石ひけんの
をとて寄ゝ寄りハ礼を一人うけ出ゝ者ハ沼
をゆゝてかゝ合て敵をあ伝ゝ程ハ十月十ゝ兵衛
佐ハゝ者の勢をゝゝて伝ゝゝゝゝ十ゝてきせ河ゝ陣
をとゝつゝものゝ敵を志ゝ者ゝけり侍所ハのゝとゝ
して馬上廿八万五千余騎と敵を志ゝ者ゝける其外中斐原氏
に一条次郎忠清を世ゝ者ゝ者ゝて二万ゝ人にて兵衛佐ゝ
ゝ人ハゝ者家の勢ゝ不二のゝ者ゝにひ人ゝのゝてひゝ
ゝりゝちてゝ寄ゝゝゝゝ兵衛佐使を三て親の敵と
ゝゝん者ゝ伝ゝ者ゝ者ゝ人ゝ伝ゝてゝゝゝ者ゝゝゝ

てさしたる事よろしからぬひなんの者ども、いまだけんぢんに入
らずしと云おそれたり使ひは雑色新先生と云者也尚
よろしき郎党たちの八人にして皆この日てまゐれの人この内
を次第まゐりけるに人々のまへにはくまのけて
いそれたりそれを見るいとすべきいろ
ものかな既おとおぼえ見ぬ武者の
をかめて一二騎を切て落ぬ義経はこれを聞て皆
うしろより今は至て懸使のそをたちまちすぐ使
及を兵事家をおてまゐ運ぶにけりとのゐけれを
軍兵いよいよ義経を攻伏したりけり

兵衛佐殿始而義経対面の事

ちかほとに義経の方にも九郎義経奥州より来り
給てられけれを佐殿弥力つよくて夜ものすのこ昔今のゐれ
給ておなに用をおもひ佐殿のゐけるを此世界の九郎答を
ら意たを聞つれを其義をいまさ存さいり佐殿ハ
いうして見参まゐれと思ひつゝ家ゐに参来り人を
古殿七せさりゐ（ゐうと笑（ゐたりのしゐ笑（ゐかの項羽ハ
浮上をうて奏を減する事を浮さり此今頼朝義経を
ゐたりかとつ家を謀代して亡父の本さを忘さる尼
長ものゐけるを抑の合戦をゆて秀衡いうや

つる事と尋られけれとも、しくかなとかつ新大納言以下
近臣を召ひ三条宮をあ源三位入道をちゝせし
おもゝしきとに兵衛佐頼朝とやいき去ぬる
養和元年春比より都を出て奥州に下りて
しる秀衡を頼ん事ふかくて憐をゝ
ひたすら参いつる甲冑弓矢馬鞍郎ふかゝ至るまて併
出したてられいしくうちかく養ひ志のゝんしてハいとく
郎ハ一人のお具しをつれ十余騎程彼かりとにひし
志のよして数度しぬとおかゝしとかゝ九郎
義経とかゝ九郎ハ

維盛以下逃帰る事

廿四日の夕方西海の矢合とちゝめて日ふれはより
平家の軍兵源氏の方をみやりたれとかゝ火のみ
ゆる事所山とい里村といひ雲霞空に覆ふのゝ
砌もとゝく也東南北三方数千騎西一方海にて我方の
船ばかりなる源氏軍兵共のつるくち渡つれしとよ
兎角ひけひるゝ京へ上る道ハ結屋とる水鳥左羽
ふへしこゝ方者ゝ旨おひたゝしかゝる是を聞て敵
已ハ寄て時をつくるとあるひ搦ゝへ中ゝ〻ぬ先ゝ
取るのし取ゝのへ者ゝ家の軍兵我先にとやゝひ者

猶と着たれども冑をゝし通し矢を負たれども弓をもたず
或は馬一疋は二三人乗て進馬とゝ云べきのおくれ
らんとも或はつかき馬ゝ乗ゝ物せり乗をゝる〳〵と
迫る者かりの事にのをて譟てを人のあらん夜の
内皆疲ゝ夜明暁方になりて源氏の方ゝ七八
百六十七の騎を調へ時をつくる事三度也東八ヶ國
をひかして山のせ北川のゝ方ゝ小三ヶ所肝を
けし人をすとをとゝ〳〵おひたゝしくゝ
〳〵中おろて久礼とも正家の方ゝ時の声ゝ合せたつ
ゝ〳〵ものせ作り久礼ゝ怪をゝして人を遣して見
せ久礼ゝ無のゝ〳〵ゝ大幕をゝとゝ張ひとゝ
太刀刀弓矢是ゝ〳〵ゝとゝ云事ゝゝ按置て人一
人ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ無ゝ他是を聞て北事頼朝ゝ三ヶ所
にゝらすとて表矢をぬぎて奉りのゝ〳〵ゝかの水鳥の
中ゝ鴨のまゝ有けるとゝ〳〵ゝ其比海邊の遊女共ゝ
作りゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
富士川七郷ゝの岩ゝ多ゝ平ゝ〳〵ゝ任號ゝ氏表
十五日東國〳〵ゝ〳〵ゝ進鷹ゝ無ゝ宮兵ゝ〳〵ゝ西都〳〵ゝ入無
人めりもちて夜ゝ明ゝ〳〵ゝ入ゝ三方ゝ久を卒〳〵て
〳〵ゝ〳〵ゝ時ゝ昔ゝ是程の大號をゝ〳〵ゝ聞ゝ〳〵ゝ及

長保元年治七月廿日の時源氏方家雪我り
と有しかとも花子千代一にたるおよさり花の花
おひたち維のをりてを雪のうへに花ぬ手おひし
ちんあ安ぬ程に矢一ぬ射に敵の船をうみ
せ雪の羽をかとぬたて無御位のせいおなくなりん
と聞おそれて にけ出る其間人の多く源氏の方へ舟
にのれといよ〳〵三郎位の勢重りにける京都の人
是を聞てやけるを雪の〳〵ぬの勝負に見よ叶とい
事を云たへたり其花たにりうしてたを是を聞子ぬ花を
ぬんぬ花を合れ計千の使矢一ぬる者してにけのぬる
ぬのおいまし〳〵而度りハ〳〵〳〵うるまし花ぬさんぬ花一陳
雪花以花を張黛まりいのをんとを人つまし花を花を
志の為例せすいいちるぬとを〳〵者の志ぬにやをちん
平家をひ〳〵雪とよ花計ぬの大将をを權亮と云都の
大将を花宗盛といへを花花を雪り合ておよ花たり
ぬり
ひ〳〵雪ぬる宗盛いるを花ちをん柱と花雪者ぬをおこして
この雪のぬ者志ぬ寅谷りて雪ぬ上花たりける
ぬ〳〵川まよ流ぬをおての黒深の衣たて花よ後の世のため
花ぬ子をにきの馬ぬ花りにんぬ花小ぬをうつき者のひ

忠清本谷をたづねといひければ
十九馬を乗りうん当時奈良法師共家をと
ゆを結たり其所行方知らず人入そあ國よたに
慌うて權亮が行ぬ鬼界の島にゆく忠清を頼をきら
れと共宮ゐ給たる清誠は母のこのそれかとくいりまち
世間をたづねいとせ〳〵ためひろう野長主馬
判官と戸國以下人は乱て事〳〵さたたりける
所へ忠清ゆ〳〵何ひとりてやゆるたた清十八の
そと見ゑ鳥羽殿に盗ありてらひをよる者りい
ゆりとついちより尋ねて入てかゝめてい〳〵ものの

たゞ保元平治の合戦を初として大小事に一度の君を
をろがれすして終ゆをしたる事ひとり人う
度東國へはゝあて左りれてこのるくあらを結事た
かとにの見ゆいたらしゆ〳〵世いの者〳〵と見ゑとや
名を入そあ國実りとや思ひ人物をろがたた、
清新蔵に及清りけり十月廿二日五条大納言國綱
郷内裏つり出して主上ゆらせめたりたゝ〳〵遠
華の花〳〵きよのつゝ名ゆ花を南〳〵こと〳〵大業舎
子行をる花きとゝ仮定ゆり名花花のけるゆ
〳〵大業舎を十月の末に東河に御華〳〵て伝授有

大内九きゝ九て京場所をつくりて神服神膳をと
とゝ大極殿九龍尾堂の壇下に廻廊殿をたて仏ゆを
めす大嘗宮をつくりて神膳を整ゆ清暑堂にて
神宴のり出御のり大極殿にて大禮おこなる豊楽院
にて宴会のり出ゆ此里大裡の躰大極殿に豊楽
大禮行(行)九ゑ九ゑ豊楽院にハ宴会のり行つゝ
九禮義行ゆ九ゑ九と出ゆ(ゆ)ゝ花ハ新嘗会
にて五節をゝりゆゝ諸人さため節九ハ十八日
福原にて五節行九ゑ新嘗会のまつりゆ出ゆ
京の神祇官にて是を行ひゆ五節ハ昔清九

所の帝より九宮にて出仏ゆ中樂を
琴にきゝ給ゝハ神女天よりくりて乙女子ゝ乙女
たゝ舞ゆ玉を乙女さゝひすゝ世のゝ玉をと五節
ゝゝひ給て廻雪の袖をひるゝ歩是を五節の始と九

南都乗徒蝶帖九事

四都と山川南都はとゆくて子ゆ九ゑ大乗日吉
九神輿をかけ中て出給ゝ神人其日春日の九榊を
のゝ中て上洛す事乃事ゝ新都ハ山重り江
重り河乃と遠くして程へたり九ゑ大安ゝ
と遷都とゆ事ゝ大政入乃ゝ出ゆ九ゑ花を

請寺諸山たうつゝへ等後代上下を敬くちるゝ山門の
衆徒三ヶ度まて奏帖をちけて天聽をおとろ
かす事三ヶ度に帖にいたく
延暦寺衆徒等誠惶誠恐謹言
請被特賞天恩停止遷都子細狀
右釋尊以遺教付屬國王者佛法皇法之德互
護持故也就中延暦年中桓武天皇傳教大師深結
契約聖主則與此都親崇一乘圓宗大師又開
堂山偖石王御願其後歳及四百余廻佛日久
耀四明之峯世過三十代天朝各保十善之德蓋山
洛右隣彼是相助故也而今朝儀忽変俄有迁
幸是惣四海之愁別一山之歎也況山僧等峯
嵐垂示特花洛以送日各雪垂烈騰王城以迷
夜洛陽陸路往還不容易者豈不銷姑射山
之月之又辺鄙之雲哉若變荒野者峯留人跡乎
悲哉數百歳之法燈今時忽消千万葉之禪林
此世將威堂寺是鎮護國家之道場為一天之固
霊驗殊勝之伽藍秀滿山中所令滅何亦無衆
徒之愁歎乎法之滅亡豈非朝家之大事哉況七
社權現之室前一人之拜覲之霊場也若王宮路遠

社壇不近者瑞籬之月前鳳輦勿臨義祠之露下
鳩集永絶若桑結疎礼奠違例者非無冥應恐
又殘神明恨欲凡當都者輙不可弃勝地也昔聖
德太子記文云素有王氣必遂帝城大聖遠望
誰愁緒之況左青龍右白虎悉備前朱雀後
玄武勿厥天然吉處不可不執彼月氏之吳山
則攀王城之東北大聖遊展日城之鹿岳又時
帝都之丑寅護國之勝地秦同天竺勝境久拂
鬼門之凶害所謂賀茂八幡比叡春日平野大
原野松尾稲荷祇園北野鞍馬清水廣隆
仁和寺如此之神社佛寺大聖垂跡者名地建護
國護山之崇廟安勝歇勝軍之灵像遠王城
八方利洛中万人貴賤帰依往来為市佛神利
生感応如此何避霊応之砌忽起無下之境哉
誤新建精舍更請神明世及濁乱人非權化
大聖感降必不在欲此等聖堙之中或有諸
家氏寺修不退勤行子孫相續自興佛法之
所也而愁從公務台愁捨去豈非抑人之善心
之応乎諸寺衆徒各從公請之時朝參護壇
暮帰練若宮城遠移住還云何若捨本尊

若肖王命左右有憚進退惟各夫憶者國豐
民厚與都無傷今國之民窮迂移者煩是
以或有忽別親屬企旅宿者或有繞破髭
不堪運載者歎之声已動天地仁恩之至不
顧之乎諸國七道之調貢萬物運上之便回
西河東津有便無煩若移余郷定有後悔
欲又大將軍在西方角已塞何背陰陽忽
違東西山川禪徒專思玉躰安穩(穩)(ヨロ)愚意之所
及乎不諫詖鳴俄有迂都是依何事乎若
由山徒乱逆者兵革既静朝廷何動若曰鬼
物怪異者可厭三宝謝天災可撫育万民資
皇德何動本宮故弃伊神田造之砌剋企遠
行熊犯人民脳乱之咎抑退國之怨歟拂朝家
之天危從昔以来偏山川之營也或大師粗師
擁護百皇或医王山王誓護一天或惠亮摧
脳或尊意振釵凡捨身事君無如我山古今
勝驗載載在人口今何有迂都欲滅此處哉竟
雲舜日之輝一朝天枝帝業之傳万代即是九
條右亞相願力也豈非慈惠大僧正加持乎聖
朝詔云朕是右亞相末葉之何背慈覚大

師之門跡忘前蹤不顧木山滅之邪況儒之
訢詔無不必當理且以取切當久為蒙哉許
由来哉於此欝望者非独衆徒愁且奉為聖
朝無又為兆民哉加之於今度之事拙愚忠一
門園城無相拒仰勅宣万人之誹謗充鬲巷
伏祈御願何因尺勤労還欲滅此氣運切
蒙罰豈可然哉縱無別天感只欲蒙此
哉許當山之存亡只在左右故也望請天
恩再廻叡慮被止件迂部三千之衆徒等
胸火忽滅而千万衆徳欝水忽衆徒等

不耐悲歎之至誠惶誠恐謹言

治承四年七月日　大衆法師等

是に因てサ一日俄に都移りしと聞へし乱を尊も紛も
をすりたたをつ見恐へり山門の訴訟昔今も
大事の小事の宣旨なりけれとも那の非法非禮の
化世聖代明主の必哉祈願いつ是程の乱逆を
めて再三の宣旨なんに横紙を申す法入を
國ありたいつてのひさるへ是を聞て古京に移り
てさひしをおけ死つる人々の恨々なる限り十三
新院福原を出御有て四代都に御幸ある大方の

にて山不稼し上形都七て川ゝ空早貧に〳〵て城
城ゝりたらず一七のくき術たりて風波弥冷―
都内ゝ―とゝ元ゝ旧都へ還御ゝる屋敷ゝて
内ゝけゝるゝ田に及ゝ

舊都還幸の事

廿四日に主上共の内裏へ行幸ゝる西院六波羅院殿
江還御ゝ家七人ゝ大政入道ゝ上洛ゝて
他家七人ゝ出ゝ人ゝ出ゝ世ゝ出ゝ
華ゝ出ゝ人ゝ出ゝ世ゝ出ゝ
此六月の間造ゝ―て内ゝ資財雑具を運ゝ

つる誠ゝ物ゝ出ゝ―く都還御の祝ゝ伊勢の―ゝ
古京へ内ゝ出ゝ―ゝ取物ゝ内ゝ資財雑具を
だしの―ゝに及ゝ―ゝ
ていゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
かゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
かゝに―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
十二月朔日兵乱七出ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
七使を―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ
宮ゝ七内使進発ゝ不能―て―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ―ゝ

所に使都へつかはしたりし後は東國北國の源氏共
いとゝ勝に乘て國々は兵多くあるべきつゝ
從ひまゐりまちうけたる國々は山本柏木おとゝ
の子孫源氏さへ東國にんを通じて関をとら
きをかまへて人をも通はせず

福田冠者希義誅せらるゝ事

十二月朔日土佐國流人福田冠者希義誅せらるゝの者
義故左馬頭義朝の四男頼朝には一腹一生の弟也去永暦
元年三月當國に流れて三月を送りける程に東京むほん
発け礼を同意の疑とて彼國の住人蓮地次郎清つゝに
仰て誅せら礼ける程に此人々同月任國住
人河内守変越智通清人々を源氏に通じて家を
滅國中を背かし正きし宿物を拵ゆるゝ間
一礼を東に奥濃を源氏にまゐらせ西をさへ
の礼を平家大こおとゝ為此國にて彼氏ア大補志
けうゝ彼後も住人奴の入道を信法師仰て是を追
討ゆるゝ通清いのしく思ひけ礼ん力合ある者りかけ
礼を伐よう信法師り自を切て討礼ぬ

平家に人々再び東國發向の事

三日左衛門督知盛小松内大将資盛越前三位通盛左馬頭

以盛義を忠度左が將清經新宮を負給ひ以下の
軍兵又東國の義勢七千を引率して
催し奥したり外記を其勢一万騎にて下向寄せ
木曾木美濃尾張の源氏を追伐のため也四日山下冠者
義清ハ柏木判官代の軍を責て敗而英の國
にて尾張七國まで討ら給ふ由聞へしかば太政入
道ハ驚給へられ給
南都の大衆蜂起之事
南都の大衆いつの時ら佛敵動す云ふ事ら
聞給ひ外記ハ何なる聲中なの為ぞ
奏聞ハ如何と及ぶあと作ら給ひ外記ハ別の行ふ
たる清盛入道ハ如何して死なん長ハ只一日に
只一度ハ入道殿と中に乘り賞今の五外禮父ハ
〻ハ外記にかゝるとかゝ南の事に中門の
南都の大衆ハ天下の一大事なるとて
ら禍を招く蜂也事ハ不慎と云ハ長ハ
が情状を書〻たりし藤原氏の先祖ハ
を重を尽して書たりしを安ぶ
たりし外記ハ せひの事ハ
責らる死として 佐中の妹尼大師

興福寺より侍を大和へ捕遣使所よりおくして三石
より北の所をおさへ寺を焼徒一切用ず法蜂起
して興福寺のもとに押寄のけんにおちらして興福
寺の子部十三人首をはねて猿沢の池のほとりに付
たり興福寺有りて近江の南都法隆寺
に大なる法師の頭を作りて大政入道清盛の頭と
と名を書て鉢おろのおとくのちちけつかり入る是
を傳聞て安らめ事也とて三千余騎の軍兵を南都へ
向しかるに大衆悪徒般若寺の二王切落
北て在る家に城郭をうまへ老の中に弓矢を帯て胃

を擐侍をたり

三位中将重衡南都を焼拂の事

十二月廿八日辰刻ひらの朝臣南都へ参向つ三千余騎
を二手に分て奈良坂般若寺へ寄せ大衆寺三十
物を防戦ゆえ三千ほの軍兵馬上にてけん
ばのけたり引て二十七城戸石ほとおく破れ入り其
中に坂部房永と云ふ悪僧有物云て弓矢取
そのの音に堅牢地神も驚給へ加護
りける東大寺の常住不滅實報寂光の生身の仏とおか
しめ給ふらへて釋尊初成道の儀式を表し天平の

中に聖武天皇忠にて高野天皇大炊天皇三代乃聖主
両目精舎を建立し佛像を治鑄し奉り給ひ波ゞ
羅門僧正洸高法師詳良喜僧正行基菩薩鑑真和尚と
いふ諸の聖衆たち導師呪願として供養し給
そまりけるにて石七十余歳になりにし金銅十六丈の
盧舎那佛烏瑟たかくあらはれて半天の雲にかかれ
白毫新に磨て萬徳の尊容を移したりし尊
像八万四千の相好の秋の月五重の雲にかかれ只十一地
の瑠璃の夜のほし空しく十悪の風にふかれし煙を中
天の穴にたなひく極大虚空に満みてりみちし焼落て

地に有ける身とと涌合くつのり如しけるのけりにみな若めり
當ら八齋会にて傳へ聞人々涙を流さぬものなかりけり瑜
伽唯識両部を始として法文聖教一巻のこらす我朝
に及す天竺震旦にも是ほどの法滅あるへしとても
有為無常のならひとは梵釋四王龍神八部冥官冥衆に
いたるまておどろきさはぎたまひけんとぞ覚へし法相擁護
の春日大明神の御意もありて三笠山の嵐の音も恨みかほなり
七大寺十五大寺を甍を並へし大力の強弓大矢の
矢つかの早の利にてさけきいとつけに百矢あるなかりけり
矢をつかうにもちたりける其丈七尺八斗也褐衣にて鎧をきたる

に萠木七糸をとゝめの服巻せ上に黒皮おとしせ鎧を着
給て三尺寸の太刀を佩び尺四寸の大長刀を持たりけり
同宿十二人左右に付て足駄せ法師共三拾余人たて
つゞけてゑん播門外に出たりけるが是をさこたり
ゆ事をゝ宿兵馬足切られて討れぬ内に大塔の
しゝ宮を礼を永覚一人たけく云ひ礼をうひたゝ
いたをおひて前を重御所に法花寺の鳥居乃
前に打出て南都を焼払ふ軍兵の中に播磨の國福
井の庄司次郎大夫俊賢と云者たてを破りてたゝ書
して西方七城郷を始として寺中に打入て歌のおもりたる

堂舎坊中に火をかけて是をかく取をの思ひ給をおと
ゝ程の者ゝ奈良坂をを討死し般若寺にて討死して
年代力をのり行者に叶へるをゝ地と川河の方へ
流ゝ共行方の叶ふ者ゝ老僧修学者共ゝ合戦尼おと
ゝ山階寺の天井のゝ七百余人の子共ゝ大佛殿七
二階とのぼりけるゝ千五百人逃げたりに
歌をゝ不せしゝて階を引て焼土のはてゝ
ゆゝ風烈しくして気ゝたりけるゝ火一たのみのひて
たゝ七堂舎に次ゝ川すゝ興福寺より始て東金堂西金堂
南圓堂七重七塔二階楼門鐘鐘蔵三面僧房四面廻廊

元興寺法花寺藥寺迫燒て後四の風吹ケレハ大佛
殿へ吹つ〻歩猛火り〳〵を所に從て五十丈嵐の一千七百
餘人七歩叫喚大叫喚天をひゝかし地を動すかとて
一人り助る〳〵ハ七分の燒死ス〻り彼寺同大焦の底ニ罪人
共ハ多数人の見る所ニ色〻と八〻千万の髏ハ佛の
上に〻〳〵ゝ守護ハ武士ハ兵杖ハ皆りて命を失ハ
学の高僧ハ猛火ハ〻りて死ス悲しきかな興福寺
ハ淡海公の氏額藤氏の一家の氏寺也元明天皇の御
宇和銅二年庚戌年建立せられて此方日本記ニ曰ハ
十余歳ニ及て東金堂ニおもします佛法最初ハ釋

迦ハ像西金堂ニおもします自然涌出ハ観世音菩薩
なり〻〻四面廊紫檀を学るたゝひの樓九輪堂ニハ
五重ハ二基ハ塔ハ宮く煙と成たるハ哀かなし〻〻礼
澄憲僧都の法滅の記と云者をゝ礼ハ〻りるおもハ
詞ハそのてたゝをしハ山階ハ三面僧房ハ八十八ハ花不
開春ハ社ハ社檀ハ法燈ハ〻る事ハ〻し〻佛像
經輪ハ煙ニハ天梵天王ハ眼忽ニハ礼堂塔僧坊ハ
ハる似ハ〻りける人ハ焼る氣ハ大倉東大寺ニハ大仏殿講堂
金堂四面ハ廻廊三面僧都戒檀寺勝院安樂院真言院
藥師院閑南院八幡宮氣比ハ社氣多社興福寺ニハ

金堂講堂南系堂東金堂五重の塔北四堂東圓堂
四面廻廊三面僧坊観自在院西院一乗院中院本陽院
北院虚院松の院傳法院真言院圓盛院自手嘉川御塔惣
宮一言主社龍蔵社住吉住鐘楼經義大陽屋（但釜不焼）宝
蔵四十四宇外大小諸川寺外の諸堂堂宇及記しがたし
家々に世の中堂長者の堂四面の上席門楼一切経蔵
章流形木草川社の深殿ちやけたる外井院龍花
院四坊西三宇彈正院新薬師寺春日の社四宮若宮
社ちとつゝよ焼ぬけたる焼死る所の数人大佛殿の
千七百余人山階寺にて七百余人有り堂に二百余人
或は堂にも二百人後の見にくたしくこの数でなく花に如て
一万二千三百余人と我国の下戦場にて亡る所の大
衆七百余人内七百人の首を法花寺の鳥井の前に
ずらりと掛る衆の三百余人の首を都一ヶ所焼其中
に左右に首のかゝる事ありとこのや
ゝ九日重ひらの形に南都を減して京へ切り入る
入る相国一人外に憤を礼て悦給ふ礼に尋ゝの
大ら人ずけぬる事をもて人中にて おちまゝ社思て
化けめ一院新院摂政殿下大臣公々を始奉りて下り
罪後を弁へ百の内の人こゝに大いのゝ人ゝ

僧をも我も矢をもちて伽藍をも焼亡ぼすべしと
悪口をもいはるるおそれのひろがる衆徒のかうべを
傾けて獄門に掛らるべきなりなる東大無福の焼
亡なる所をもかしこかりしの濫や堀をも
投入られに当穀念院の南の堀をも長法師のこの
ふくしてうつてうとせしかるる聖武天皇の御置せ
給ふる東大寺八幡文云吾寺無福せば天下の無福
せんは寺衰微せば天下の衰微せんとも今灰焼
とおりめるるくしら国土も減亡うしくひかりとおぼ
ひのひけるを左少弁行隆先ら八幡に参りて通夜せ

〈ヨリ外本ナシ 故ニ記ス〉

られたりける夜の示現に東大寺奉行せ時を是をのつ色
くとて筋を引きるとみておろしてみるまたこのりけり汝
志死に美へて此筋を取て下向しなりけれ当時の事に
ら東大寺造営せらるる事なるべしと人中にあるひ
なりて二月を送り年程に此焼亡の後大仏殿造営を
此沙汰なりける時弁宮内に此行隆をもれて奉
行職ら作せられる其時行隆たまひなるを不
蒙勅勘志て次第に進ぜたるおもはるは今も長宮
にそなはるせ第一とて文に漢字脱漏を
今迄かな

平家物語巻十一終